

我が教員人生に悔いなし — 50年の教員人生を振り返って —

教職課程センター所長 客員教授 蛭川 幹夫

はじめに

このたび50年にわたる教員生活を閉じることとなり、これまでの教員人生を振り返ってみることにしました。商業科教員としてスタートした私は、高等学校および専攻科にて27年間、城西大学にて教職と簿記・会計学の教員として23年間教育に携わってきました。様々なことが脳裏に浮かぶこの年月は順風ばかりではありませんでしたが、私にとっては精一杯の自己実現ができ充実した日々でした。

私が教員を志したきっかけは、故郷愛知県の高校時代の日本史と漢文の恩師の影響が大きかったと言えるでしょう。日本史の授業は教科書に表しきれない史実やその背景にも及び、時に笑いを伴うなど実に興味深いものでした。一方、漢文の授業は漢詩に描かれた人物、情景、心情など、初めて触れる漢詩の世界に大いに感動を受けました。両先生の指導を受けることで教職に憧れる気持ちが芽生えたのです。

決め手になったのは大学時代の恩師との出会いです。経済学部に進学した私は教職に進むことを半ば諦めていましたが、大学4年の4月に恩師石井栄一先生より教職を目指すよう強く背中を押して頂いたのです。そして、埼玉県教員採用選考試験「高校・商業」に合格しました。しかしその後、ゼミナールや部活動の仲間達が次々と優良企業に内定していく過程で、私は心が大いに揺れ、民間企業を受験し内定を得たのです。民間企業の内定を得てからは教員と民間企業のどちらに進む

か大いに悩み続けました。しかし、私は初心を断ち難く民間企業の内定を辞退するため出向いた先で、人事担当の方に「教員の仕事が辛くて辞めたくなくても、当社に行けば良かったとは考えないように。もしそれで辞めるようなら当社に来ても同じことになると思う。立派な教員になるよう頑張りなさい」と言われ教師の道を歩む決意をしました。

思えば私の50年の教員生活は、言い尽くせぬ程の喜びと充実感に満ちたものでした。お力添えを頂いた沢山の方々に心から感謝する日々です。

私がどのような教員人生を過ごしてきたかを振り返ることで、これから教員を目指そうとしている学生や悩める若い先生方の一助となれば幸いです。

第1章で高校および専攻科の教員としての歩みをたどり、第2章では衰退の道をたどる商業教育の現状と課題について述べ、そして第3章で城西大学での23年を振り返りながら、第4章の最終章で城西大学の活性化について述べてみます。

第1章 高校および専攻科の教員としての歩み

(1) 教師としての礎となった初任校での5年間 (1970年4月～1975年3月)

1970年4月、県北の田舎町にある普通高校の夜間定時制課程（全日制課程を兼務）から私の教員生活が始まりました。定時制課程は1948年の新制高等学校と同時に発足し、経済的理由で全日制課程に進学することが難しい子供たちなどに働きな

がら学ぶ場を提供してきました。集団就職の受け皿として日本の高度経済成長を支える存在もありました。しかし、1970年代に入ると、高校進学率の向上や経済社会の変化のなかでこれまで大きな役割を果たしてきた定時制課程は、入学者数の低下や多様な学生の入学などで大きく変化していくことになります。

私の勤めた定時制で学ぶ生徒の多くは、昼間は工場や商店、大工・左官・歯科技工士等の見習い等として働いていました。生徒の多くは素朴でまじめで人なつっこい性格でした。放課後も多くの学生が学校に残り体育館でバレーボールや卓球に興じていました。最後に体育館を閉めて彼らと一緒に夜道を下校したことや、照明が照らすなか黙々とグラウンドを走りそのまま会社の寮まで走って帰った男子生徒の姿が今も記憶に残っています。

一方、私は教育職員の免許を取得しているとはいえ、教員としての資質・能力が未熟なままに教育現場に飛び込んでいきましたので、問題行動を起こす生徒とのぶつかり合いが絶えず、最初の1年は心身が疲弊していく自分がいました。当然、本学の教職課程センターで行われているような、教育現場で実績を積まれた相談員の先生方による実践的な指導も受けていませんでしたから、日々、試行錯誤の連続でした。しかし、振り返ってみると、ここでの経験はその後続く長い教員生活の礎となる期間であったと思います。

定時制課程でこそ学べたことや、楽しい思い出はたくさんありました。労働のあと疲れているにもかかわらず頑張っている彼らの姿を見て、私は、わかる授業・楽しい授業を目指さなければならぬと心したものです。

ここでの5年間で私を大きく成長させたこととして、①人権教育を学ぶ機会に恵まれたこと、②多くの研修時間を持つことができたことをあげることができます。

① 人権教育を学ぶ機会に恵まれた

私が教員になった1970年代は高度経済成長のまっただなかにはありましたが、一方で職業や婚姻をめぐるさまざまな差別が温存されている時代でもありました。そのため教育界においては同和問題に積極的に取り組むなど人権意識が重視され、学校現場においては人権教育をテーマとする研修が積極的に行われました。私にとって、新人教員時代に人権意識を養うことができたことは、その後の教育活動にとって大いに意義のあるものでした。

② 多くの研修時間

定時制課程に勤務していたこともあり研修時間に余裕があったので、私は将来商業高校で勤務することを想定し、3年間にわたり上武大学の聴講生として簿記論や会計学・工業簿記等の講義を受けたり、本庄タイプ専門学校（当時）で和文と英文のタイプライティングの習得に励みました。私は普通高校の出身であることから、商業科の専門科目に対する知識や技術が不足していました。それだけに、この研修を通して新しい知識を吸収し、商業科の教員としての自信を少なからず得ることになりました。

(2) 教員として飛躍した8年間

(1975年4月～1983年3月)

2校目に勤務したのは秩父地方の商業高校でした。自宅から片道35kmの遠距離通勤でしたが、春から初夏にかけては山々の新緑の移りゆくさまと庭先に咲き誇る花々を愛で、秋は紅葉を楽しむことができ、通勤の中で四季を感じることができました。勤務校について言えば、生徒の学力は必ずしも高いとは言えないものの、周囲を山に囲まれた土地柄か、素直で優しい生徒が多い小規模な商業高校でした。一方で頭髪や服装の乱れそして出席不良等、いわゆる生徒指導の対象となる生徒の指導に明け暮れる日々もありました。

この高校では、理解の遅い生徒や生徒指導の対

象となる生徒への指導をとおして、教員と生徒との心と心の触れ合いこそが教育の原点であることを学ぶことができました。また、1校目とは異なり教科の専門性を存分に発揮することが求められ、商業実践や簿記等の専門科目を教えるなかで、全学、学年、商業科といった組織で仕事をすることの意義と心構えを学ぶことができました。振り返れば商業高校の空気感を肌で感じながら、教員として飛躍した時期であったと言えますが、ここでは①生徒指導と教科指導、および②長期研修について述べます。

① 生徒指導と教科指導

生徒指導では忘れがたい二つの思い出がありました。

一つは、登校拒否になった生徒への指導です。当時は登校拒否ということばが社会では一般的に知られていない頃のことですから、今のように社会の支援も見込めませんでした。私は、欠席が続く生徒に毎日のように電話し出席勧奨を続けましたが、なかなか思うに任せず辛うじて彼を卒業させることができたという苦悩の日もありました。

もう一つは、いじめ問題への対応です。あるとき1週間ほど欠席している男子生徒の欠席理由が同じ学年の男子生徒によるいじめであると知った学年主任が、いじめた生徒を殴りつけ「もし彼が死んでしまったら、おまえの心の痛みはこんなものではない」と、今では当然許されない暴力により対処した一件は今でも忘れられない光景として心に残っています。

私はここでの8年間の生徒指導から、問題行動を起こす生徒でも心根まで曲がっている生徒はいない。だから教員が生徒のなかに飛び込んでいって指導することが大切であるということを体験から学びました。

教科指導については、ここでの指導経験から「勉強が嫌いな子はいない。分からないから嫌いであり、勉強が分かれば学校も好きになる」との

確信を得たので、難しいことを易しく教えることに留意するようにしました。とはいえ、易しく教えるためには、教えることをはるかに超える知識が必要です。そのため、教材研究には専門書と「誰でも分かる…」「図解でわかる…」「実務に役立つ…」など初心者向けの実務図書を併せて利用し、テキストに書かれている一字一句は自分が理解し納得できるようになるまで読み込むようにしました。また易しく教えるには「例え」を使って説明することが有効であることから、生徒目線に立った身近な事項と結びつくような「例え」を工夫し積極的に取り入れるようにしました。

② 長期研修

教員になって9年目の1979年は、4月からの半年間を聴講生、9月からの半年間を埼玉県内地留學生として、一橋大学で故中村忠教授（会計学）の指導を受ける機会に恵まれました。私は、なぜそうなるのかに応えてくれる先生の著書が好きで普段から教材研究に利用していましたが、一橋大学で先生の指導を直接受けたことで、簿記や会計学への関心がさらに高まっていきました。その後、私の講義や簿記に関する著書には、ここで学んだことや先生の教えが大きく反映されるようになりました。

高校の教科書として先生が書かれた『現代簿記会計Ⅰ』（一橋出版）の内容について、先生の自宅で長時間にわたり意見交換したことは、今となってはとても良い思い出になっています。

（3）商業の教員として飛躍した8年間

（1983年4月～1991年3月）

3校目は当時、卓球部と野球部が全国区で活躍する県内有数の商業高校に勤務しました。ここでは、学力の高い生徒たちを相手に教鞭をとるなか、これまで行なってきた教科指導と生徒指導の取り組みが一気に報われるのを肌身で感じました。私が商業科教員として大きく飛躍した時代で

あったとも言えます。

教科指導は簿記会計関連科目と商業実践を中心に行いました。特に商業実践については商業科の市原幸夫先生と協力し、その指導内容・指導方法を大きく変えました。また、ここでの8年間は簿記部の顧問としての活動が私のキャリアに大きな影響を与えました。ここでは、簿記部での取り組みに焦点を当て振り返ってみます。

簿記部とは、学校教育活動の一環として、簿記の資格取得等に関心をもつ同好の生徒が、教員の指導の下に放課後などに自発的・自主的に活動するもので、「高度な資格取得を目指すことによる人間形成」を目的、「^{むげんだい}夢限大」をキャッチフレーズとして活動しました。

簿記部では、高校生が目標とする日本商工会議所主催簿記検定（以後日商簿記検定と略す）2級と、全国商業高等学校協会主催簿記実務検定（以後全商簿記検定と略す）総合1級は全員が1年で取り終えてしまいます。そこで残りの2年間を使って日商簿記検定1級に挑戦することにしました。当時は全国的にも商業高校で日商簿記検定1級をめざす学校は希な時代であり、私自身も日商簿記検定1級を本格的に勉強していなかったので、自分で予習をしてから教えるというまさに自転車操業の日々が続きました。簿記部の主な活動は放課後の2時間（土曜日は3時間、競技会が近づくとは始業前の1時間を追加）と、年2回行う1週間におよぶ校内合宿です。校内合宿はまさに勉強漬けの一週間でした。

簿記部の活躍は想像以上に評価されることになり、数年にわたり新聞報道されました（資料1）。簿記部からは7人の日商簿記検定1級合格者と、税理士試験の2科目（簿記論と財務諸表論）同時合格者を1人輩出することができました。また、山本貴之先生（現：城西大学非常勤講師）の他、7人の簿記部卒業生が埼玉県下の公立高校で商業科の教員として活躍しています。

なお、簿記部の副顧問になっていただいた武井文夫先生（現：城西大学非常勤講師）とは、「全国高校簿記選手権大会で日本一になろう」と誓い合っていただけに、半年後の私の転勤は後ろ髪を引かれる思いでした。

（4）高校教員最後の3年間

（1991年4月～1994年3月）

4校目は関東3商業の一つ（他は銚子商業、高崎商業）と称され、長い歴史と各界で活躍する多くの名士を輩出してきた伝統のある商業高校に勤務しました。この学校では埼玉県商業教育研究会事務局の仕事を担当する機会に恵まれたことで、他校の先生方との交流を通して埼玉県の商業教育についてその全体を知ることができました。

授業ではグループ学習についての研究と実践を行い、その成果を発表したことが印象に残っています（資料2）。ここでは、私がグループ学習の研究に取り組むことになった経緯を振り返ってみたいと思います。

ある日のことです。今日も生徒が静かに話を聞いてくれ良い授業ができた、自分の授業に満足して職員室に向かう途中、並んで歩いていた教育実習生から「後ろの方の生徒はまったく理解できていませんよ」という一言がありました。そんなことはないだろうと翌日の授業で確認テストをしたところ、確かに理解していないことが判明したのです。大変ショックでした。そこで、私は授業のやり方を大きく変え、生徒が主体的に参加する授業を展開するためにグループ学習を取り入れることにしたのです。その狙いは、生徒の主体的な学習態度を養うことと、全員参加型の授業を展開することでした。授業中わからないところがあっても、生徒は分からないのは自分だけであり先生に質問するのは恥ずかしいと決めつけ、そのままにしてしまう傾向があります。グループ学習を導入すれば、生徒間の相互作用が高まり、苦手意識

を持つ生徒を減らすことができると考えました。一方、相対的に学力の高い生徒にとっては、グループ内のクラスメイトに教える過程で、知識の深化と自尊感情・好意性など個人的・社会的特性を育てることができると考えました。また、章ごとのテストをグループ対抗で競争させることにより、授業にゲーム感覚が取り込まれ、効果的な授業環境につながると考えました。

2年間の試行錯誤の結果私が一つの成果だと思っているエピソードがあります。それは、成績不良者の2人がグループで管理する簿記学習日誌に記述した以下の文章に集約されます。

生徒A「この頃よくわかるようになってうれしい。明日の確認テストは燃えるぜ」。

生徒B「今日も僕達の班は全員合格だった。最近、確認テストは合格しているけれども、これは皆が僕に教えてくれているからだと思う。班の人が僕に一生懸命教えてくれるのだから、僕はこれからも合格していきたいと思う」。

この2人の文章を読んだとき、簿記の授業の活性化と、グループ学習を取り入れるときに設定した2つの狙いが達成できていると確信しました。ここで私が考えていたことは、まさに新学習指導要領（高校：2018年3月改定）が求める、主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の視点に立つ授業と合致していると思われる。

（5）専攻科の3年間

（1994年4月～1997年3月）

1994年4月、埼玉県に全国初の商業の専攻科である情報会計専攻科が開設され、その専任教員の一人として久保田克之先生（現：城西大学非常勤講師）と共に勤務しました。専攻科は大学や高校の通常の課程の上にさらに2年間程度学ぶための課程のことで、当専攻科は教育目標を「高度な資格取得をめざすなかで、専門分野における知

識・技術を体系的・系統的に学ぶとともに、職業人として豊かな人間性を養うことで、社会で活躍する職業人を育成する」と定め、会計コースと情報システムコース（募集人員各20名：1期生、会計コース30名、情報システムコース13名）の2コースでスタートしました。校舎は町立深谷商業学校の校舎として大正11年に建てられ、その後深谷商業高校の記念館（市民に二層楼と呼ばれ親しまれている）として保存されてきたものを改装して使用しました（資料3）。指導体制作りにも精力を注ぎました。私と久保田先生の二人は、学生が自らの能力を最大限に開花・発展させるためには徹底的に勉強させることが大切であると考え、通常の授業（午前9時から午後3時30分）の他に午後4時半から午後7時（土曜日は午後3時半、検定1か月前は午後8時、同1週間前は午後9時）までを研修タイムとして教科指導を行いました。そこには、設立にご尽力された猪野幸男元深谷商業高校長等の労に報いたいという思いと、ゼロからスタートした専攻科を何としても軌道に乗せたいという気概があったからこそできたのだと思います。すべてが手探りのなかでの取組でした。

ここでは、専攻科で学んだ①教育方法、②生徒指導、③進路指導について述べます。

① 教育方法について

生徒が勉強漬けの2年間を過ごすために、日々の授業の他にも、企業会計原則の注解を暗記するなどの課題を毎日課しました。これまで受験勉強の経験がほとんど無い学生にとって相当ハードな日々であったと思います。また、体力面を考えて、校舎の掃除はすべて雑巾がけにしました。一日のほとんどを椅子に座って過ごす生徒には、適度な運動になっていたと思います。木造校舎である二層楼の長い廊下を学生と一列になり日々雑巾掛けの競争をしたことは忘れ難い思い出です。

ほとんどの学生は勉強漬けのハードな生活にも3か月ほどで慣れ、毎日のように課した課題も難

なくこなしたことは、私にとって新鮮な驚きでありかつ貴重な体験でした。私はこの体験から、やる気を起こすための環境を整えることが教員にとって重要であることを知りました。そして、やる気を起こす環境は、分かる授業、仲間とともに学ぶ授業、仲間との人間関係、目標の設定等の工夫で作りに出せるのです。

なお、1期生は会計コースで50%（日商簿記検定1級に12名、全国経理教育協会主催簿記能力検定上級（以下全経簿記検定と略す）に3名）、情報システムコースで69%（通産省情報技術試験第2種に9名）の学生が目標とする高度な資格取得を果たしました。ちなみに第2期生からは情報技術者試験第1種にも数名が合格するようになりました。

② 生徒指導について

生徒指導はまったく不要でした。これも私にとって新しい驚きでした。専攻科で勉強漬けの生活を続けることで、彼らに学ぶ意欲や積極的に掃除などを行なう意欲が生まれ、自主性、責任感、社会性等が養われたのだと思います。このことはとても興味深いことであり、開校した頃には想像できなかったことです。学期末には定例の大掃除がありますが、私には誰もが掃除を楽しんでいるようにさえ思えました。正門前の八百屋さんからは「専攻科生が良く挨拶をしてくれて嬉しい」とバナナなどの差し入れをたびたびしていただきました。私は、二層楼前の国道17号線の長い歩道を、学生が一生懸命掃除してくれたことを昨日のように思い出します。

③ 進路指導について

1期生の卒業時期が就職氷河期のピークに重なってしまい、大卒でも高卒でもない専攻科生に就職先はあるだろうか心配した私と久保田先生は、就職先開拓のため秋口から年末にかけて1日2～3社のペースで100社を超える会社を回りました。お陰で卒業生全員が学んだことを生かせる

職種に就職することができました。就職に関しては忘れられない思い出があります。専攻科を訪ねた中堅企業の経理課長が専攻科の教育方針を高く評価し、専攻科生を数年にわたり複数名採用していただいたことです。

（6）27年間の教育実践とその総括

ここでは27年間の教育実践を通して私がめざしてきた、①わかる授業の追求と、②情熱を注いだサークル活動の指導、そして③27年間の教員生活で学んだことについて総括します。

①わかる授業の追求

「わかる（楽しい）授業の追求」について、簿記の授業を例に述べたいと思います。簿記には検定試験がありますが、近年は検定試験の合格率を高めることが目的化している風潮があります。その結果、教科書は使用せず問題集だけで授業を展開する先生も少なくありません。私はそれを良い傾向だとは考えていません。問題集だけを使っての授業では、簿記の基本が分からないまま簿記の学習が済まされてしまうだけでなく、教育の基本となる読解力、理解力さらには応用力が身に付きません。肝要なのは、教科書を読み記述内容を理解したうえで、さらに理解を深めるために問題を解くという一連のサイクルを確保することです。しかし、これに対しては、時間がかかるし理論をやっているのは簿記嫌いの学生が増え、検定試験も合格しないという反論が予想されます。

私は（ア）要点整理資料の作成と（イ）授業の工夫を行うことで、検定試験の合格と簿記の基礎・基本の習得の両立をめざす授業を追求しました。

（ア）要点整理資料の作成

私の授業では最初生徒にテキストをゆっくり読ませます。次いで、書かれている文章について理解ができていないか確認するための質問をしたり、重要箇所にアンダーラインを引かせたりしながら

ら、再度私が読みます。その後、配布した要点整理資料に必要な語句などを書き込ませながら授業を進め、最後に問題集で知識の固定を図ります。ここで要点整理資料とは、板書時間を短縮するために、板書の代わりに作成する資料（サブノート）のことで毎時間学生に配布します。作成にあたっては次の3点に留意しました。

- A. 重要な語句や計算式等は空欄とし、授業の進行に合わせて空欄を埋めていく形式を採りました。また、授業を展開するなかで改良すべき箇所や新たなアイデアが生まれたときは、ただちに資料に赤を入れ毎年改定しました。
- B. 「なぜそうなるか」を常に意識し、生徒が復習するときの理解を助けるため、話しことばで易しく記述することに留意しました。
- C. 用語をやさしく教える工夫をしました。簿記の学習で用いられる専門用語は、社会人の経験がない学生にとって、初めて耳にする言葉が多く、分かりにくいものです。そこで、生徒の理解を促すためにはどのような図解や例えが有効なのかを常に考えることが大切です。そのために同僚や書店の店頭に並ぶ入門書・実務書から学ぶことも大切です。ちなみに、拙著『基本簿記』（実教出版）はその成果の集大成です。

(イ) 授業の工夫

わかる授業を展開するための工夫を書いております。まず話し方です。私の場合、某先生の授業がよく分かるという評判を聞けばその先生から指導を仰ぎ、出張先で教科指導にすぐれた先生が授業をされていると聞けば、その先生の授業を聞き、先生の話される速度、抑揚、例え等を学びました。授業の展開についても工夫をしました。私は生徒間の能力差は少ないと考えていますので、授業のレベルを特定のレベルの生徒に合わせて

いうことはしませんが、授業は常に理解できていない生徒を意識して進めます。具体的には、理解できていない生徒により多くの質問を投げかけます。生徒が1回の質問で答えられないときは、質問の切り口を変えて再度質問します。また、教科書の例題等を説明したときは、その後で「解ったか?」と確認します。ここで大切なのは、「解らない」という答えが返ってきたときは、理解できるまで繰り返し解説することです。また、生徒が質問に答えたときは、それが正解であろうと不正解であろうと、何らかのことばをかけることが大切です。理解できないことで授業に参加しない生徒が、授業を理解し授業に参加することで、クラスの雰囲気良くなり、結果的に理解できている生徒にも良い授業環境になるからです。

②サークル活動の指導について

サークル活動の指導は私の教員生活にとって切り離せないものでした。ここでは高校で指導した簿記部の指導から学んだ、サークル指導のノウハウ等について述べてみます。私は常に、「楽しくなければサークル活動でない」というスローガンのもと、次の2点に留意して活動を行ないました。

- 目標は高く設定する

生徒の能力は無限です。生徒がそれを開花・発展させるためには、豊かな教育環境と厳しさが必要です。厳しさに耐え頑張ることで生徒に自信・自主性・自尊心・社会性等が芽生え、生徒は大きく成長します。同じ目的意識を持って集まったサークルならなおさらのことです。目標は生徒が少し頑張れば手の届くところではなく、彼らが無理だと思うぐらい高いところに設定しなければならないと考えました。

- 目的は人間形成である

サークルの目標が仮に日商簿記検定1級や各種簿記競技会の優勝であったとしても、目的はあくまでもサークル活動を通しての人間形成であ

り、豊かな学校生活を送ることにあります。そのため、望ましい集団活動の追求が、サークル指導の大きな課題となります。私は、望ましい集団活動を行うために次のことがらを大切にしました。

a. 民主的な雰囲気作り

民主的な雰囲気の中かで生徒は自らの個性を發揮することができるので、民主的な雰囲気の中かでの横（同学年）と縦（先輩・後輩）の繋がりを大切にしました。

b. レクリエーションの有効利用

レクリエーションは、人間関係の構築やコミュニケーションの促進に役立つなど集団活動に欠かせない重要なアイテムであると考えサークル活動において積極的に利用しました。

私にとって簿記部は生徒がのびのびと活動する理想のサークルでしたが、そこにはレクリエーションの効用が大きかったと確信しています。

c. 基本的な生活習慣の確立

サークルの目的が人間形成にあることから、日々の活動において挨拶等マナーに関して厳しく指導するとともに、報告・連絡・相談についても大切にしました。

③27年間の教員生活で学んだこと（総括）

27年間の教育実践から学んだことをまとめると次のようになります。

- ・教員は生徒の能力をそれまでの結果で見切りがちであるが、それは間違いであり、誰もが無限の可能性を持っている。
- ・教育は教える側にも教わる側にも厳しいものであるから、教える側は生徒のためであるという意識と愛情をもって教育にのぞむべきである。
- ・知識の教授と人間性の育成が教育における両輪である。

第2章 商業教育の現状と課題

商業科の教員養成に携わってきたものとして、商業教育の現状と課題について触れておきます。

商業高校は戦後の経済成長に合わせ、産業界を中心に社会の各方面に多くの人材を送り込んできました。しかし、高学歴化による中学生の普通科志向の影響を受け、商業高校への入学者数は1970年の691,883名をピークに減少に転じ、その後衰退の一途を辿っています。例えば、埼玉県の「中学校卒業予定者の進路希望状況調査」(資料4)によれば、2014年度入試から2018年度入試までの、10月1日現在における商業科の志願倍率は、2014年度から順に、0.88(普通科1.33), 0.76(同1.36), 0.82(同1.36), 0.80(同1.36), 0.79(同1.35)といずれも1倍を下回っている状態です。ここでは商業高校の衰退を少しでも食い止め回復に向かわせるために何が必要なのか述べます。

(1) 資格取得に偏った商業教育に終止符を打つ

例えば埼玉県においては、2018年3月に商業科を卒業した学生の約51%が大学に進学しています。一方、商業高校では資格取得に重点を置いた教育が長らく行われ、検定試験の合格者を少しでも多く出すことが教育の目的になっているように思います。しかし、このことは商業高校やそこで学ぶ学生にとって必ずしも好ましいことではありません。また、高校への進学を考える中学生や保護者にとっては、資格取得の勉強が大学進学にとって明らかに有効であると理解しない限り、資格取得を看板に掲げる商業高校を魅力ある選択肢ととらえることは難しいと思います。

ここでは簿記教育に限定して、資格取得重視の教育の問題点を指摘します。

商業高校には全国商業高等学校長協会が1984年に制定した「3種目以上1級合格者表彰制度」があります。資格取得をめざす教育には生徒が目的

意識を持って学校生活を送るなどのメリットがあります。しかし、現在では資格取得が目的化し、かつ熾烈化することで教育の本質が歪められているように思います。

私が大学の教員になって驚いたことは、商業高校の卒業生に簿記嫌いの学生が多いことや、検定資格を保有しているのに簿記の基礎・基本を理解していない学生が多いことです。あるとき、商業高校の卒業生から「僕の学校は検定1週間前になると毎日1限から6限まで簿記の授業になり、数年分の過去問題を繰り返し解かされました。おかげで解き方を覚え検定は合格しましたが、簿記は何にも分かっていないし大嫌いです」という話を聞いたことがあります。まさに、資格取得重視の典型例であり、これではせっかく商業高校で専門科目を学んでも大学教育には繋がりません。それどころか簿記嫌いの学生を作っているのです。

私は、教育実習生の研究授業に参加するため、多くの商業高校で実習生の研究授業を見てきました。そこでは実習生がテキストを使わずに授業を進めていることをいつも疑問に思ってきました。検定試験の合格だけを指すなら要点整理の資料と問題集（あるいは問題集だけ）で指導するのが合理的かも知れません。しかし、それでは商業教育本来の理念に沿わないのではないのでしょうか。

高校での簿記教育は、検定合格をめざし先生方による手厚い指導が行われます。しかし、大学では教員が検定試験を視野に入れていたとしても、一般的には合格のための指導は期待できません。そのため商業高校の卒業生が入学後により上の資格取得をめざすためには、独学で勉強しなくてはなりません。その際必要になるのが簿記の基礎・基本と、思考力、判断力、そして学びに向かう力であり、合格至上主義に偏った教育からそのような力を養うことは難しいのです。したがって、資格取得に偏った現行の商業教育は、就職する学生のためにも、進学して専門性をさらに深め、幅広

い知識や技術を身に付けようとする学生のためにも好ましいことではないのです。商業高校の活性化のためには、大学進学者の増加を視野に入れ、資格取得偏重教育を改めるとともに履修する商業の専門科目を厳選し、国語・数学・英語などの一般科目と専門科目の両方について、基礎・基本を重視する教育が重要であると考えます。

(2) 商業高校から大学に進学することの優位性を積極的にPRする

中学生が高校選択するときの情報源は学校説明会や中学校・塾の先生そして保護者です。私は関係者に商業高校のPRの一つとしてぜひ話して欲しいと考えていることがあります。それは、商業高校から大学に進学することの優位性です。

私は城西大学で充実した大学生活を過ごし社会に巣立っていった商業高校の卒業生を数多く見てきました。彼らは、高校時代の学習で経済や経営に関する基礎的・基本的な知識を身に付けており、経済や経営などに関する専門的な学問を学ぶにあたりスムーズに入っていけるメリットがあります。特に会計や情報処理に関する教科ではそのことが言えます。そして、履修する教科に余裕が生じることで、他の専門科目やサークル活動に専念することができ、豊かな大学生活を送ることができるのです。私は大学生活を有意義に過ごした商業高校の卒業生が、高校時代の偏差値等に関係なく、自ら志望しかつ大学で学んだことを生かせる大企業等に就職するのを多く見ており、商業高校への進学は一つの選択肢として大いにありうると心から信じています。

第3章 城西大学での23年間

(1997年4月～2020年3月)

縁あって49歳のとき教職担当教員（指導科目：生徒指導、特別活動論、商業科教育法、商業科教

材研究、教育実習等)として城西大学経済学部経営学科に転職することになりました。当初は先生方の素晴らしい研究実績や人間性に圧倒されるとともに、大講義室での講義に苦しむなど、大きな環境の変化に心身のバランスが崩れ通院する日々が続きました。11月に入る頃になると授業が終わったあとで学生が話しかけてくれるようになり、それに合わせて体調も回復しました。そして、自分の武器はこれまで27年間にわたり培ってきた、難しいことを易しく教える技術とサークルを指導するノウハウであり、それを生かせば城西大学でも活躍することができると考えました。私の城西大学の23年を振り返るにあたり、ここでは

- (1) 経営学部ミニмумスタンダード(会計),
- (2) エクステンションプログラム講師, (3) サークル指導(教員養成サークル, 蛭川簿記塾),
- (4) 執筆活動, (5) 役職教員の経験, (6) 社会における活動等の7点について述べます。

(1) ミニмумスタンダード(会計)

2004年4月、経営学部マネジメント総合学科が開設されミニмумスタンダードと呼ばれる教育方針が立てられました。これは在学中に英語・情報処理・会計についてそれぞれ最低の資格取得を保証するというもので、初めてこの構想を聞いたときは、この斬新なアイデアに大いに感心しました。そして、私は会計の責任者を任されました。

当初、会計のミニмумスタンダードは日商簿記検定3級とするのが執行部の考えでしたが、私は以下の理由でそれに反対し全簿記検定3級を主張しました。

簿記教育をめぐっては大学生に簿記嫌いが多いという話をよく聞きますが簿記が難しいわけではありません。ただ、大学では簿記の学習時間が絶対的に少ないうえに、簿記は技術であり記帳や報告書の作成といった作業が欠かせないのに、大学生は作業を嫌がり頭で理解しようとするため、簿

記が身に付かず簿記は難しいとなるのです。したがって、簿記を初めて学ぶ普通高校卒業生に日商簿記検定3級を受験させるなら合格率は30%前後であり、出題範囲等が異なる全経簿記検定3級なら70%台の合格率も可能だろうと考えました。ここで、70%という数字はミニмумスタンダードを成功させるために鍵となる数字なのです。学生が自分も合格しなければと思う数字だからです。100%合格する商業高校もあるのに、70~80%しか合格しないのかという声を耳にすることがあります。しかし、簿記教育の指導者なら理解できることですが、大学において学部の必修科目とし、そこで普通高校の卒業生が80%前後の合格率をあげることは大変なことなのです。それでも城西大学で(資料5)のような成果を上げることができるようになったのは、先生方が共通の目的意識を持ち、熱意溢れる指導をされた結果だと考えています。全経簿記検定3級合格は確かに小さな一歩ですが、この授業をきっかけにより上級の簿記検定試験に挑戦する学生が増えたこと、そして、検定合格が学生のその後の大学生活に良い影響を与えたことは教育的に大きな意義があると考えます。そして、何よりもミニмумスタンダードが実施されたことで、学生の会計リテラシーが格段に高くなったのは紛れもない事実であると確信しています。

城西大学では会計入門Ⅰ・Ⅱの講義でミニмумスタンダード(会計)を目指しますが、会計入門Ⅰ・Ⅱの主な年間行事(2019年度)は次のとおりです。

— 会計入門Ⅰ・Ⅱの主な年間行事(2019年度) —

5月18日(土)第1回小テストのための補講

(3限)

24日(金)第1回小テスト(0限)

27日(月) ♪ 追試験

6月23日(日)第2回小テストのための補講
(2・3限)
26日(水)第2回小テスト(0限)
7月2日(火) 〃 追試験
9月8日(日)前期末追・再試験のための補講
(2～4限)
11月8日(金)第3回小テスト(0限)
13日(水) 〃 追試験
18日(月)～23日(土)
検定試験対策講座(18日～22日5限,
23日1～4限)
24日(日)第196回簿記能力検定試験
2月14日(金)～15日(土)
検定試験対策講座(1限～4限)
16日(日)第197回簿記能力検定試験
※補講は学部全体で実施

経営学部には運動部に所属する学生が多いことから、どうしても大会への参加等で講義を欠席しなければならない学生がいます。しかも講義は週一回ですから一度の欠席が彼らに与える影響は計り知れないものがあります。年間行事に小テストのための補講や追・再試験のための補講を設けているのは、そのような学生の途中での脱落を防ぐためです。

(2) エクステンションプログラム

(1991年～2018年)

私は正課以外にも、国際文化教育センターのエクステンションプログラム「簿記会計特別講座簿記上級コース」の講師として、日商簿記検定1級商業簿記・会計学」と「日商簿記検定1級工業簿記・原価計算」の講座を毎年交互に指導してきました(2時間の講義を週2回,延べ50回/1年)。受講生は20名程で、簿記塾生(後述)を中心とした本学の学生と一般社会人です。

日商簿記検定1級は、極めて高度な商業簿記・

会計学・工業簿記・原価計算を修得し、会計基準や会社法、財務諸表等規則などの企業会計に関する法規を踏まえて、経営管理や経営分析を行う為に求められるレベル(日本商工会議所のホームページ)です。内容が高度なだけでなくボリュームもあり学生の負担は大きいものがありますが、受講生はよく頑張り、教える私にとっても実に充実した時間でした。私はこの講義でも「なぜそうなるのか」ということと「易しく教える」ことに留意して指導しました。なお、エクステンションプログラムの運営形態の変更にともない2019年3月でもってこの講座が廃止されました。高等教育を行う大学だからこそ是非残して欲しい講座でした。

(3) サークル(教員養成サークル, 蛭川簿記塾)指導

ここでは、私が立ち上げた二つのサークルについて述べます。

①教員養成サークル(1999年～2017年)

教員養成サークルとは、教員をめざす学生(現役生はもちろん非常勤講師として教育現場で働く卒業生を含む)が、教員採用選考試験合格をめざし活動するサークルで1999年に設立しました。

当時、日本の教育現場は不登校、学級崩壊、凶悪な青少年犯罪の続発、無気力、学力低下、そして教員の規範意識の低下など多くの問題を抱えていました。そのような大変な教育界に有為な人材を送り込みたいという思いと、本気で教員になることを望んでいる学生に教員採用選考試験に合格するためのサポートをしたいという思いからサークルを立ち上げました。ちなみに、当時教職課程を学ぶ学生が経済学部、理学部、薬学部で延べ150名程いましたが、大学には教員をめざす学生のサポート体制はありませんでした。

それではなぜサークル指導なのかということですが、それは私がサークル指導の経験から集団指

導による教育効果の大きさを学んだことや、将来教員になる学生に集団指導における指導方法や教育効果を体感して欲しいという考えがあったからです。

教員養成サークルの目的と2004年当時の会員数、活動時間およびサークルの特徴は以下の通りであり、「合格するまで面倒をみる」をモットーに活動しました。

〈目的〉

1. 教員採用選考試験対策
2. 教員養成段階における学びの不足を補う。
 - ①教職に対する情熱・使命感の醸成
 - ②自己表現能力の育成
 - ③教職全般に関わる知識
3. 教員としての心得の習得

〈会員数〉

- ・院 生 3名（経済1，理学（数学）2）
- 学部生 16名（経済1，経営5，理学（数学）10） 延べ19名

〈活動時間〉

- ・学生による自主活動
 - 木曜日（10時～5時）
 - 土曜日（10時～12時）
- ・蛭川の指導
 - 土曜日（1時30分～17時）

〈サークルの主な特徴〉

1. 県内で非常勤講師として働きながら教員採用選考試験に挑戦しているサークルOBと一緒に活動しており、現役生に与える影響は計り知れないものがある。
2. サークルメンバーにいろいろな学部（時に他大学）の学生がおり、一般教養科目等で相互に教え合うことができる。

活動を始めてしばらくは、就職課の職員から教員採用選考試験は受かるわけ無いから一般企業を受験しなさいと言われ嘆く学生がいました。しか

し、2001年度の埼玉県教員採用選考試験高校商業に現役生二名が合格し、2003年度の同試験で埼玉県の高専商業を城西生が独占（3名）するとともに、岐阜県の高専数学と茨城県の中学理科に現役生がそれぞれ1名合格すると、その後は合格に弾みがつきコンスタントに合格者ができるようになりました（資料6）。また、経営学部の入学者のなかには「商業の教員になりたければ城西大学に行きなさい」と高校の進路指導の先生に言われ城西大学に入学したという学生の声をししば聞くようになりました。

②蛭川簿記塾（2003年～）

学生募集で商業高校を訪問すると「せっかく検定試験を合格させ大学に送り出しても、大学ではその上の資格を取るための指導をしてくれない」という不満をよく耳にしました。一方、大学に目をやれば、大学がユニバーサル化するなかで、無気力で、自信がなくて、何をして良いか分からないといった学生が増殖していました。私は、大学がそのような状況を打破するためには「高校の部活動の大学版」が有効であるだろうと考えていました。

城西大学に移り6年が経とうとしていた2月のことです。フレッシュマンセミナーの授業でやり残した連結会計を春休みに講義しました。その時の補講参加者の頑張りをみて、私はこの学生たちに日商簿記検定1級を挑戦させてみたいと思い、2003年2月簿記塾を設立しました。

簿記塾の目標は日商簿記検定の1級合格ですが、目的はあくまでも充実した大学生活を送ることと社会人基礎力の育成です。具体的には自主性、自学力、協調性、行動力、プレゼンテーション能力等々の育成と、高度な簿記の知識の習得です。当初11名でスタートした簿記塾はその後30～40名の部員で活動するようになりました。

簿記塾の活動時間や特徴等は以下の通りです。

〈活動時間〉

- ・通常週3回、同じ空き時間の学生がグループで活動する。

夏の長期休暇中は延べ22日間（10時から16時、うち特別強化活動期間の5日間は9時から19時まで活動する。

- ・日商簿記検定2級に合格している学生は、前述のエクステンションプログラム簿記上級コースを受講することを義務づける。

- ・レクリエーションについて

定例として、新入生歓迎コンパ、クリスマス会、忘年会、夏季一泊旅行、卒業旅行（二泊）

〈サークルの主な特徴〉

1. 学生主体の活動である

簿記塾は学生の主体性を重視するため、すべての活動は原則として学生が企画・運営する。

顧問は活動が目的・目標から逸脱していないか注視し、逸脱した時は指摘し助言する。

2. 民主的な雰囲気の中でこそ個性が発揮できることを常に意識して活動する。

3. サークル活動は原則として学生が学生に講義する形態をとる（プレゼン能力の育成）。

4. レクリエーションを重視する（企画力、リーダーシップ、協調性、連帯感等の育成）。

5. 対外的な活動を積極的に取り入れる（社会性）。

オープンキャンパスの学生スタッフ要員（入試課）、会計入門Ⅰ・Ⅱの担当教員に対する雑務補助、近隣の商業高校への学生派遣等。

〈成果〉

ここでは17年間の簿記塾の活動の成果を述べてみます。

最初に目標についてですが、日商簿記検定1級にはこれまでのべ24名の学生が合格しました。エクステンションプログラムで学習したことが大いに活かされました。私にとってエクステンションプログラムの講義は特別なものでした。講義のなかで彼らが時々見せる高い理解力や応用力に接し、彼らの成長を実感できたからです。時には、彼らが考えた別解に舌を巻いたこともありました。

簿記塾では学生が学生を講義することでプレゼン能力を養います。私は彼らの発表を指導しますが、彼らのなかには現役の先生方に負けないと思えるほどに素晴らしい講義をする学生も現れ、改めて彼らの成長に驚かされました。

次に簿記塾の目的である充実した大学生活を送ること及び社会人基礎力の育成についての成果を検証してみます。

簿記塾生の学びの状況を調べた資料があります（資料7 「簿記教育による人間形成」より引用）。次頁の図①から図③までは過去3年間に卒業した25名について、1年次から4年次までの学年末の成績順位を示したものです。図④は平成29年度の4年生について1年次から4年次前期までの成績順位を示したものです。この図（縦軸：経営学部における成績順位）からは簿記塾生が1年次の成績を卒業まで維持していることと、どの年度の入学者にも在学中に成績を大きく伸ばしている学生がいることが分かります。ちなみに図③のEは消防士を希望しており、3年次の夏休みから

日商簿記検定1級合格者数

年度	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
人数	3	2	2	2	2	1	2	0	1	2	2	2	3

は実質的に休部状態に入った学生です。

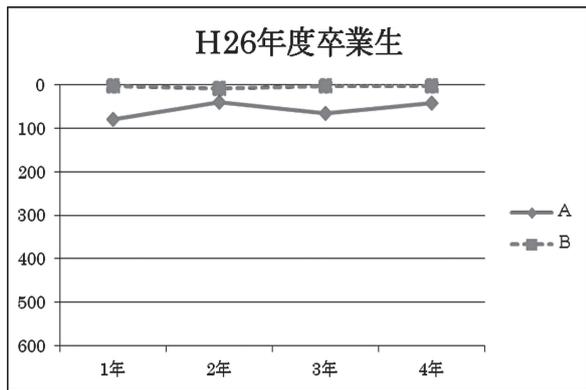
一方、図⑤から図⑦までは、30名の学生を高校の調査書に記載されている評定平均値をもとに3グループに分け、図①から図④と同じように学年順位を表示したものである。この図からは入学時点で偏差値の低い図⑦のグループに属する学生が、サークルの1/3を占めていること、そしてそのメンバーの多くが上級学年に進むにつれ成績順位をあげていることが読み取れます。

就職内定先をみると、ここ6年間に5人の女子学生が(株)大林組に内定したほか、2019年度生についても東鉄工業(株)、日本道路(株)、日鉄鉱業(株)、日本年金機構など順調に内定を得ています。しかもその多くは大学時代に学んだことを

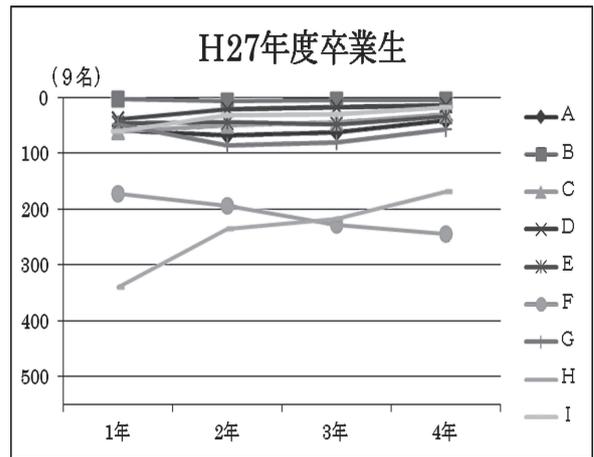
生かせる職種であり、メンバーの多くが自ら満足する形での進路選択ができました。また、簿記塾で磨いた簿記や会計学を生かすために商業科の教員として活躍する簿記塾卒業生も9名になり、最近では彼らの教え子が何名も城西に入学してくるようになりました。

簿記塾は歴史を重ねる中で広く外部に評価して頂けるようになりました。会計入門担当教員や経営学部・就職課・入試課などの職員だけでなく、資格予備校のTACが発行する『TAC NEWS』(2013年6月号)や日本商工会議所のホームページに特集で紹介されるなど、学外でも評価されました。

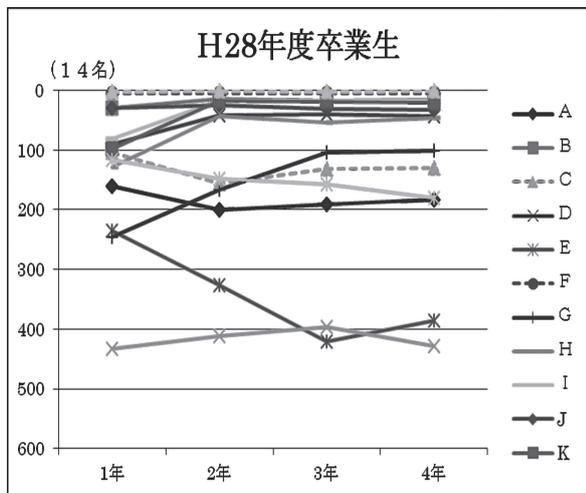
このように2つのサークルは正課外教育として



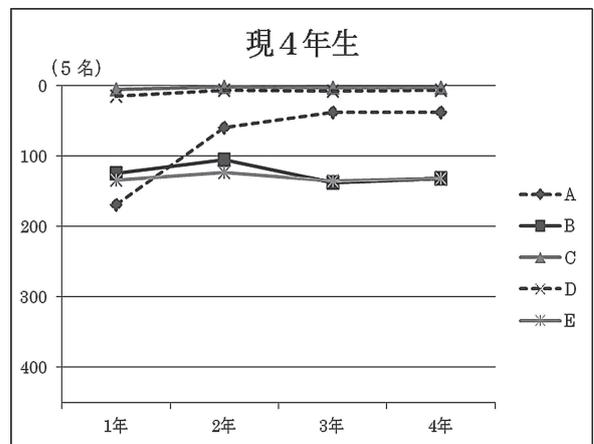
図①



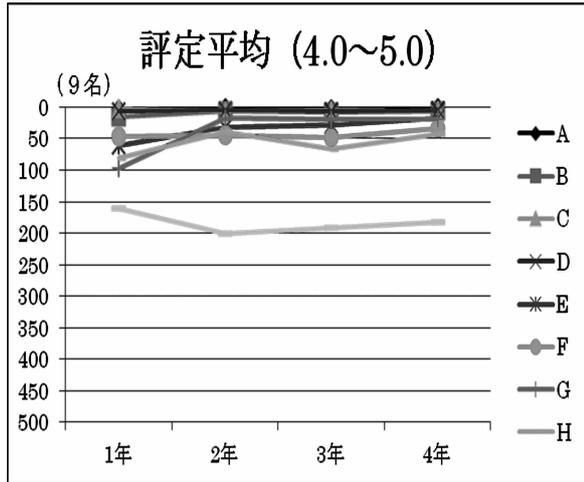
図②



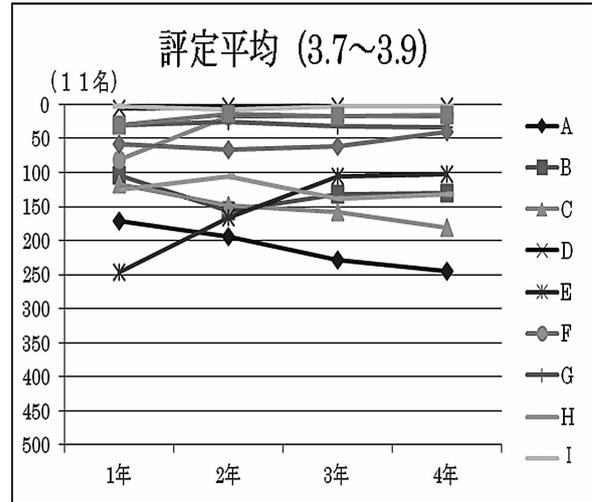
図③



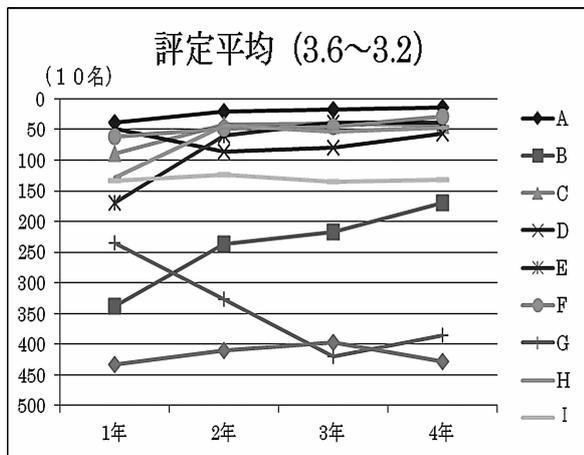
図④



図⑤



図⑥



図⑦

行ってきた活動ですが、その活動を通して学生の自己実現に役立つことができたと考えています。そして二つのサークルを通して、創業者水田美喜男理事長が目指した「学問による人間形成」の一片を实践できたと自負しています。

(4) 簿記関係の書籍の執筆

私は1990年に執筆した拙著を皮切りに、大学の教員になってからも多くの執筆に携わることができました(資料7)。なかでも文科省検定済教科書『高校簿記』『高校会計』(共著、いずれも実教出版)、専門基礎ライブラリーシリーズの1巻として刊行された『基本簿記』(単著、実教出版)、日本商工会議所公認テキスト『商業簿記3級テキスト』(片山覺先生編集、拙著執筆、キャリア

ク)、そして編集責任者として関わった日商簿記ゼミシリーズ(実教出版)の3冊に携わることが出来たことは、私にとってまことに貴重な体験であり大きな財産となりました。

(5) 入試部長・経営学部副学部長

私は2016年9月から入試部長(2016年9月~2018年3月)と経営学部副学部長(2016年9月~2017年3月)を、2018年4月から教職課程センター長(2018年4月~)を命じられました。ところが城西大学に移ってからもサークル指導を含め学生への教育活動にエネルギーを傾注し、またリーダーシップを発揮することが不得手な性格であることが影響し、管理職としての能力不足を痛感しました。結果的にご期待に添える活躍ができなかったことが悔やまれます。

(6) 社会における活動等

私は、城西大学国際文化教育センター(エクステンションプログラム)の「簿記会計特別講座簿記上級コース」の講師として28年間にわたり、学生と社会人を対象に日商1級の講座を担当した他、学外における各種講座の講師や、高等学校の学校評議員等を経験することができました(資料8)。また、日本商工会議所の簿記検定部会委員

として12年間にわたり、この分野の第一人者である諸先生方と簿記検定試験に関する仕事を一緒にできたことや札幌・名古屋・大阪の商工会議所で「簿記指導者セミナー」の講師という大役を仰せつかったことは、私にとって身に余る大役でした。

第4章 城西大学の活性化のために

大学が大衆化し、入学する学生の資質や能力そして知識・興味・関心が多様化するなか、大学は時代の変化や社会の要請に対応した教育研究活動が求められています。しかし、現実には大学教育に適応できないことで大学生活に夢を持って、アルバイトに専念する日々を過ごしている学生や、入学したものの大学に居場所がないと悩む学生が増えていることは紛れもない事実です。このような現状を打開し城西大学の活性化を図るためには、文科省の「大学における学生生活の充実方策について（報告）—学生の立場に立った大学づくりを目指して—」（2000年6月）が参考になると思います。

この報告書は、今後の大学の在り方として、（1）「教員中心の大学」から「学生中心の大学」へ視点の転換と、（2）正課外教育の積極的な捉えなおしを提言していますが、私は（2）正課外教育の積極的な捉えなおしに注目してみたいと思います。

私は、正課外教育として取り組んできた教員養成サークルや簿記塾が、正課教育を補完するとともに、学生との人間的な触れ合いを通じて、コミュニケーション能力、協調性、自主性、自学力、リーダーシップ、道徳観や責任感など倫理性等の涵養に大いに有用であったと確信しています。そして、正課外教育としてのサークル活動に城西大学活性化の可能性を見いだしたのです。

ここでは正課外教育としてサークル活動に限定

し提案したいと思います。城西大学の活性化のために、新規に設けるあるいは既存の充実をはかるサークルとして、例えば美術・書道・陶芸・吹奏楽・声楽・チアリーダー・ダンス、あるいは語学、簿記等、趣味や文化・研究に関わるものが挙げられます。このうち、美術・書道・陶芸は、城西大学水田美術館の有効利用につながり、土曜日の活動を社会人に開放することで地域貢献にも役立ちます。また、美術・書道・チアリーダー・ダンスは女子学生の増加が見込まれることで、城西大学の特性や課題解決に貢献することが期待できます。なお、指導する教職員は中学・高校等で部活動の指導実績を持つ退職教員や、地域連携を踏まえ地域に在住しその道のプロフェッショナルである方をお願いし、正課外教育として大学と連携をとりながら進めるのが大切であると考えます。

第5章 最後に

50年を振り返ると高校（定時制、全日制）、専攻科、大学、さらに通信制高校、専門学校、各種講習会など、幅広い方に指導する機会を与えて頂き、さまざまな経験を積みさせていただきました。指導経験の豊かさは、教員としての指導力の向上に繋がったと思います。しかし、講義を受ける学生は一人として同じ能力や性格の持ち主はいないうえ、集団としてのクラスの空気感も時や時代により異なります。また、教育や学校に対する社会の考え方も時代と共に大きく変化します。一方、教える側も年を経ることで指導に円熟度が増す反面、体力の低下が気力や情熱の衰退を招くこともあります。

振り返ればプロの教師をめざして50年間努力してきましたが、未だに教育の本質はつかみきれず、毎日が日々試行錯誤の連続です。それでも私が教員生活を全うできたのは、まさに大学ならびに研修でお世話になった恩師や職場の同僚・職員

の皆様、さらに私の人生の師であった泉福寺前住職の故嵩山式道和尚のご指導があつてのことで。心より御礼申し上げます。

また、学生から日々受ける若いエネルギーのお陰で、学校生活の日々を豊かな気持ちで過ごすことができました。学校行事の節目等で学生から受けた熱い気持ちも忘れられない思い出として残っています。

最後になりましたが、昨今教育を取り巻く環境が大きく変わり、先生方が大変な思いで日々の教育活動に携わっている状況を耳にします。そのような状況のなか一人でも多くの学生が教員をめざし、私が経験させて頂いたように充実した日々を送ってくれるよう心より祈念し筆を置きたいと思えます。

令和元年晩秋 教職課程センター長室にて

〔資料1〕簿記部に関する主な新聞報道(見出し)

1986年8月6日「熊谷商高の二人－創立66年の快挙－ 難関を突破簿記1級」
(読売、毎日、サンケイ、朝日、埼玉)

1988年8月6日「女生徒が1級に合格－熊谷商3年連続の快挙－」

1990年1月8日「県内初、高2で簿記1級」

8月14日「全国高校簿記選手権大会－熊谷商、団体2位、個人で尾崎さん総合優勝」

12月26日「女子高生が難関突破－税理士試験の必須2科目－」

〔資料2〕新しい会計科を模索して

－プリント学習付きグループ学習の実践報告－

1992年8月 全国商業教育研究大会(第40回)

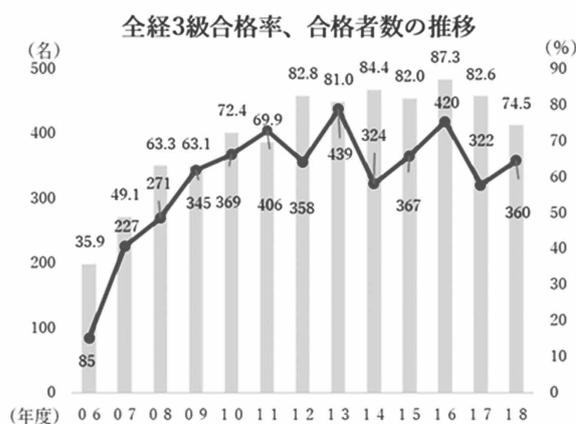
〔資料3〕深谷商業高校記念館(二層楼)



〔資料4〕『これからの専門高校に求められる魅力について』

2019年1月30日 埼玉県地方産業教育審議会

〔資料5〕全経簿記3級合格者数および合格率(普通高校卒業生)



〔資料6〕 教員採用試験合格者数（ただし、教員養成サークル及び蛭川ゼミ卒業生）

平成31年4月現在

I. 公立学校

年度	高校商業（情報を含む）	数学・理科	特別支援／小学校
2001	埼玉 2		
2002			
2003	埼玉 3（埼玉県独占・倍率41倍） 長野 1	岐阜 1（数・高） 茨城 1（理・中） 群馬 1（数・中）	
2004	埼玉 2 静岡 1	埼玉 1（数・中）	埼玉 1（小）
2005	埼玉 1 愛知 1	埼玉 2（数・中） 東京 1（数・中高）	
2006	埼玉 3	埼玉 2（数・中）	
2007	埼玉 1	茨城 1（数・中） 東京 1（数・中高）	東京 1（小）
2008	北海道 1	東京 2（数・中高） 埼玉 1（数・中）	
2009	埼玉 1 福島 1 群馬 1	埼玉 2（数・中）	
2010	埼玉 1 宮崎 1	埼玉 1	埼玉 1（特別支援）
2011	埼玉 1	埼玉 2（数・中）	千葉 1（小） 埼玉 1（特別支援）
2012	埼玉 2	埼玉 2（数・中）	
2013	埼玉 2（埼玉県独占・倍率45倍）	埼玉 1（数・中）	
2014	長野 1 新潟 1		
2015	埼玉 1		
2016	埼玉 2		
2017	埼玉 3		埼玉 1（特別支援）
2018	埼玉 1 秋田 1		
2019	埼玉 3 大分 1		
計	40	22	6

II. 私立学校

法政大学第二高等学校（東京）（数学）	帝京安積高等学校（福島）（商業）
浦和実業学園高等学校（埼玉）（商業）	鶯谷高等学校（岐阜）（情報処理）
城西大学附属城西高校（東京）（社会）	計5名

- 〔資料7〕おもな著書・論文〈問題集は除く〉 (単著)
- 〈著書〉
- | | | | |
|-------|-----------------------------------|-------|--------------------------------|
| 1990年 | 日商簿記検定1級教科書『工業簿記・原価計算』共著 実教出版(株) | 2005年 | 大学における新しい簿記教育を目指して (単著) |
| 1994年 | 調理師教科全書『商業簿記』共著 社団法人全国調理師施設協会 | | 日本商業教育学会第16回全国大会 |
| 2001年 | 段階式『日商簿記3級 商業簿記』共著 (株)税務経理協会 | 2006年 | フィジカルマネジメントによるヒューマンスキルの育成 (共著) |
| 2004年 | 文部省検定済教科書『高校会計』共著 実教出版(株) | | 日本教育工学会第17回全国大会 |
| | 『簿記会計学』共著 (株)学文社 | 2017年 | 簿記教育による人間形成—簿記塾の活動報告— |
| 2005年 | 日本商工会議所公認『日商簿記3級テキスト』単著 (株)キャリアック | | 城西大学教職課程センター紀要—創刊号— |
| 2007年 | 文部省検定済教科書『高校簿記』共著 実教出版(株) | | |
| 2008年 | 専門基礎ライブラリー『基本簿記』単著 実教出版(株) | | |
| 2012年 | 『新版日商簿記3級テキスト』共著 実教出版(株) | | |
| | 『新版日商簿記2級 商業簿記テキスト』同上 | | |
| | 『新版日商簿記2級 工業簿記テキスト』同上 | | |
| 2019年 | 『日商簿記ゼミ 3級教本』単著 実教出版(株) | | |
| | 『日商簿記ゼミ 2級商業簿記教本』共著 実教出版(株) | | |
| | 『日商簿記ゼミ 2級工業簿記教本』同上 | | |
- 〈論文〉
- | | | | |
|-------|-------------------------------------|--|--|
| 1995年 | スペシャリストへの出発 (共著) | | |
| | 埼玉教育No.556 | | |
| 2002年 | 専攻科の将来像—地域社会への知的財産の還元— (共著) | | |
| | 日本商業教育学会第13回全国大会 | | |
| 2004年 | 城西大学における商業教員養成の実践報告—時代に適合する商業教員の育成— | | |
- 〔資料8〕主な社会における活動等
- 〈主な講師〉
- | | |
|-------------|-----------------------------------|
| 1996年～2005年 | 簿記指導者研修会講師 (埼玉県商業教育研究会) |
| 1997年～2003年 | 埼玉県職業訓練センター講師 (埼玉県立中央高等技術専門学校) |
| 1998年～2001年 | 埼玉県トラック総合教育センター講師 (社団法人埼玉県トラック協会) |
| 2005年～2010年 | 初級簿記講座 (坂戸市商工会) |
| 2014年 | 簿記指導者セミナー (札幌、名古屋、大阪商工会議所) |
- 〈主な委嘱等〉
- | | |
|------------------|---|
| 2003年10月～2006年3月 | 平成15年度目指せスペシャリスト運営指導委員会委員 (埼玉県教育委員会教育長) |
| 2004年4月～2009年3月 | 狭山経済高等学校学校評議員 (埼玉県教育委員会) |
| 2009年4月～2013年3月 | 熊谷商業高等学校学校評議員 (埼玉県教育委員会) |
| 2010年4月～2013年3月 | 山村国際高等学校学校評価第三者委員会委員 (山村学園学校長) |
| 2004年8月～2016年3月 | 簿記検定部会委員 (日本商工会議所) |